里見八犬傳

第三輯

巻五

へ13
709
15

遠門 13
號 709
卷 15

明治二十六年十月九日 購求

南總里見八犬傳第三輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第廿九回

雙玉を相換て額藏類を識る
西歐に相遇て義奴怨珉報ふ

濱路ハ事の趣を告ぐ小歎兄ハ十寸鏡影を沼認ぬ家父家母のなゝ名告る兄道節ぶいとも切なる言の葉小露の玉の緒引とゝめられて。愛時苦痛を忘れまでふ情願ハ幾ども稱へども又想像る良人のゐぶ宿業のまゝ竟ふかる非命ハ実の母れ造ゑ一罪よ報ひまく妹伏の契浅草生れ小野ゑ屍と曝らん。さゑバ因果の理りふ悟の窓を開けども。なほうち曇る胸の月晃煩惱乃山の挾ゑ碎けく落る涙の龍のちまぐの兄と今さゝふ面あらぬも恥く。又浅きく哀ーさふいのく弱る命根の今を限ゑとゝ人まぞいぐ一ト言遠さんと。

く尓頭を擡て。いと苦しげに息吻つ。原来和女ハこれが家兄欽仇を證く
あハれ也。思ひかける死ぬ抱へおのれを別れの今般の對面現なれがし限リに侍り。
身を慕ひし年月をふるゝのみ今さらに悔しく哀しき家長の陣殺なる名を
あらはせむとめの心ありし待る處産の恩の縁高き實の親をあらそはで過させ。
人と生れし甲斐あらじと思へバ悲しくあらうし神と佛によりあはせ祈盡しく
物体なくも恨をしるの待るにし絶なんとする息の内に。その願の稱ひし。
神の冥助欽佛の慈悲欽歡し時に就て赤哀しくもまなをこらず身の業因母へと
向へバ家兄のためよ母的の讐なるより死罪科家尊の怒にさへ集を
あらハおりけるに慈悲とハあらで外にさも訪せぬなれ親胞兄弟を心境よ
しと恨ても迷ひハ晴て又曇る涙の雨に蓑虫の父とハ鳴けど鬼の子れ母よ
離れし死後の恥世に在る程ハ養親達の貪欲邪慳に身をかれるとしいくそ

むくその心が苦しめ偶結びし妹と伕の縁し果敢なく中絶て。仇ある人に倖れ倶よ
この野の土となるべ情死とや世に謡ばん冥土の障ざへとなのもなかなかで。心をあらためなれ
るゝ待るまじこらふハが丈夫ハ故管領持氏朝臣譜代の近臣大塚匠作ぬしが孫
犬塚番作一戍大人の一子に犬塚信乃戍孝とあん呼れる弱冠に侍るか。
こらふハが養母の甥なれどもその心ざまいと正しく文学武藝に暗からぬ由緒
ある武士に待れども身孤となりしかバ伯母夫許我を寓せて所領の田
園を横領せられいと窶しく侍る時運に任して人を怨ぬも哀に侍る
名刀ありその村雨丸に侍り親の遺訓に年来の宿願を遂果さんとて
件の宝刀を携て許我殿へ参らんとせし前の夜に伯母夫婦の腹黒きた
るくとの左母二郎を相語つ神宮の漁獵に假托て宝刀を掏替奪ハせてるに
左母二郎も亦好智をめぐらし横取して腰に帯ひりさるまじともならず良人ハ。

許我へ来たりて宝刀を取り復さんといふよ
甲斐なき死の深痍久しぬ水のあられよりもそそぐ惜むを
良人の名を伝へ願へはん刃の資のさすよりも直に許我へ勅して安否を問ひ
定めて宝刀を遂与ふべきよるべ恩義を伝へ産の母の故を以て家兄
そかるるいとひろく伝へども外よるべきの後までの心かつて我果
させ給へ大慈大悲の恩徳なりん只願ハこのるの聽容てこそ家兄の
君頼む言葉に声枯れて霜霄の虫と細るに拭ふ毎に潰る血ハ
まべるるとけり道節ひそかに嘆息ハ母と母との故をひそかに
忌んや夫をあふ今般の願言推辞べるよあるねども家事ハ私に君父の
讐を後ひそかに私事を先まるこ〜ハ月ごろ君父の讐扇谷定正ハ竹
よりも〜一刀ハ怨を復さんとおもふそのの便を伺ふ不思議なるハ

いるこの名刀を見紙のく讐ハ近つる宿望遂く餘命あるその時ハそそ
この夫犬塚信乃とかりんが安否を問ひ羊もるくて環會ハ村雨丸を返さ
けるこハ憑まぬるのあるまバ定うふハうけ引きて〜これの讐のよハ死るこの
大刀も亦分捕せるまん君父のるとありんや。
貞操節義ハ婦人の道ハ忠信孝義ハ男子の道ハ勇士の本意かくの如し。
と理り迫く喩ふるん濱路ハ望を失ひくるるバ何とかるる讐を討て
の後ぶうけ引きて〜と心つる回答こハ忽地匂塞りく一声苦と叫びたく
そぶく息ハ絶へくけり。道節驗をるバ倩稀なる女弟が節操今般
送せ一條を肯ざるも武士の意地せめくハまく小亡骸を歛めて冥府の苦
惱を救んさふとくかそ抱れ揚く火定の坑へ推ふ〜残る柴を投入る
まハ夜風のまふ〜埋火の再び燃く焔こる茶毘の煙ハ鳥部野の夕もかく

やと想像る歎きハさらじめにのやまして靈時擁護あれて合掌し泡影無常弥陀方便一念唱名頓生菩提弥陀佛とゝと廻向しつ。悵然として刃を起し彷徨とて立もゐらぬまで又数回嘆息し。大約法師の終を執る。柴薪を積てみづから焚火を火定とるのん唱ふるこゝろ。朝にハ信濃なる戸隠山の長明法師が鳥部野に火定せしも又紀國那智山の應照も終を火定に執行しも元亨釋書第十二巻忍行篇に載ぞるのめりされハ大義を辭んために譲に愚民を欺きし火定の因果眼前妹が身を焚く茶毘とふあれりかれ亦いふかきの鄕に死しいふかきの野にか骨を埋ん定めなき世のためしとま後るゝを先とちも北郎山頭一片の煙とかのへべいと果敢なしとおもひさぐちつゝ天うち仰死詐なき歎きに夜ハ深されど此山を踰んとて彼名刀を腰に跨立去らんとする程に後方に竊く額藏ハ濱路道節が問答をおちもなく窃聞つ。

貞操義烈に感佩して。嘆息の外なかりしが是愁に彼処に到らバ節婦乃臨終を慰るよしもなかるべけれど。そが兄道節を誅ずして物ならず腰を折らん。躬をくやしく心おもはるゝすもとおもひかけれバ端なく出て復つゝしと祢く。ぞに村雨の一トカハ左母二郎が横死せし道節がゝ手に落されど廻件乃大刀をもて。讐に近つく便著ませんとて濱路が遺言をうけ引ざる事の趣に膽洩れて肚裏に思ふやう。定正ぬしハ大敵え道節死力を竭せども怨讐報んこと輙かるまじ。渠轗軻なるが大刀も喪ん幾彼人讐を斃して前諾に負くことなく犬塚生に彼宝刀を返さん日のあるとはいふとも火急の難義を救ふに足らじ轍の鮒に水を飼ふが日を歴て枯魚を市に訪ふとも亦何の益かハあるべき。さればとて犬塚生の安否いまだ心もとなし名告て由を告るとも明に地に大刀を乞とらば渠その妹にまち許さねバいかにぞされに遮らんや組伏てとらば復んと思ひ決めつ腕を

道松

法人の形
なれ
おさえる
奏の
玉
玄同
蟹藏

呢りく瞬もせず闚窺とりハ彼なりや濱路を火葬して。村雨の大刀を腰に挿副。
立去んとしつるハ癖者等と喚とめて。樹蔭を内より走り出て刀の鐺を
丁と捉へ両三歩引戻せバ驚きながら振かへりて。鐺うち拂ひ除大刀を抜んと
するを擒ばやと引組で抜も力も劣らぬ優ざ勇者と勇者の相撲あり。
寸分の隙あらせじと咲に捉るを放さじ曳と声をかけ立てちゝと足を
踏鳴し。沙石を飛し。小草を蹴ちらしき両虎の山に戦ふ如く。鷙鳥の肉を争ふに
似たり。勝負果べくもあらざりけれバ。とかくする程に額藏ハ年来膚を放さざる護身
嚢の長紐索きれて。道節が大刀の緒にからくまとひかゝく貫縁かつ跳むかふく
引断離られて。嚢ハ彼が腰に著たり。そを取んとする程に。わかれても綏さん。
道節忽地振はなちく。大刀を引抜兎斬んとするを。はやくも左と挨合せて
丁と発矢と戦ふ大刀音電光石火と見めるほど。一上一下に燠の刀尖沈て挑みし。

跳踰引バ著入り進めバ退く。樊噲が鴻門を破るとき関羽が五関を越るの日
孰か劣り。孰か勝ん天ハ隈なき月の照りし地に亦荼毘の光あり真夜中なれども
明なりけれバ互に相挑て迷ハねど道節悍て撃下す刀を額藏左に受流せバ
刀尖あまりて腕より流て鮮血を物ともせず丁と合して大刀風尖く道節が
身鎖の緜襟刀尖ふかく裏徹て肩なる瘤を砍傷れバ黒血さつと濆けり。
瘤の中小物あまたん蝨の如く飛散て額藏が胸前へ礫と當る程落しを
や遑ず左手に楚と握留て右手に刀を閃し。又透間もなく切結ぶ大刀さへ侮り
がたけれバ道節ハ受とめ又受ながら声をかけ立や等一等。いふべきことあり。
汝が武藝甚佳けれ。復讐の大望あり。豈小敵と死を決せんや。且く退け。
といはせもあへず額藏眼を瞪していふべき本事をしりたる命惜くハ村雨の宝
刀を遁すべく疾くわたせかくいふ者を誰とかしる犬塚信乃が無二の死友犬川

荘助義任ぞ汝が名ハ何なる犬山道松鳥髪入道。道節忠與宝刀を返せと
敦圉ハ道節呵々と冷笑ひ。かゝる大望を遂るまでハ女弟にさへうけ引ざる
大刀を汝に與んや否ずでやハ。とく〳〵遁与せよと再び詰よせ附廻して。跳
蒐て丁と撃を。左邊に拂ひ右邊に挂る。道節ハ透を揣りて火坑の中へ
飛入りし。發と立る煙とともに往方ハ知らずなりにけり。額蔵吐嗟と追
かけて俯て見つ又仰て瞻り。原来火遁の術をもて迯去し。欲残念さる
ふても道節が瘡口より飛出たる。かゝる玉ふ入りしハ何なるらんいと不審と燃残る
火光によせて熟視るに。吁不思議や犬塚信乃とかゝる秘藏せし。孝義一
双の玉に等しく光も形も寸分違ハず。この玉にハ忠の一字あり。さてハ怎生怪
しと驚くばかりに又とみかうみて沈吟ど。忽地曉て莞尓と笑て。此彼をひ
あハせ見ば。彼犬山道節も終にハかゝる同盟の人となるべき因縁あらん。さるにても

かゝる玉を秘おかれし。護身嚢ハ彼が腰刀にかけて取とめたり。その肉身より出たる玉ハ
名ハなけれどかゝる身に入りしるの。奇異とやいはん微妙とやせん怪しといふもあまりあり。
これによりて推ときハかゝる玉も彼宝刀も後にハ復る時あらん。それはともあれかくも
あれ犬塚生が許我の首尾心もとなき限りなれども。ちかきほどの因縁あらんにハ。
彼処にも神の冥助あるべし。いかでとふ名ふともちかよりて許我へハ十六里。今東
間に告るによしなし。よしや大塚へ立かへりて復せんとも。あらんかし。豫て仮傷を
造らんとおもふあわらう幽損傷負たり。これも物怪の幸ひなる欤と自向みづから答て
手拭をもて瘡を包て又燃然と火坑を見かへり。さるほどにも濱路とハ丈夫も
及ざる心烈節義いと痛ましくも感ぶて日ごろハかゝる腹心をしらざりしはあさ
ましかりき。死しても必霊あらん。犬塚生に再會せずおんみが最期の心烈と巨細に
告て後の世に夫婦一蓮托生の契を固うきべし。かゝる一下言の手向を受て解脱の

室に赴きぬ。又南無阿弥陀佛と念じつゝ、退くべくもあらぬ程に、左母二郎が亡骸に撲地と跌ち透しつ。かくてみづから心にうち点頭、刃を抜て首掻落し、傍の榎に伐掛て、その幹を推削り、墨斗の毫を抜出して、遽しく墨を染、是は悪黨網乾左母二郎也。或秘藏の大刀を掠て、又處女濱路を拐帶し、その從ざるを怒て遂に烈女を戕賊す。天罰仍件の如し。年月日時と書つけて、そが儘墨斗を腰に納め、斯書遺せば、錯傳へて此彼情死とするもあらんか。是も節婦へ追薦のことゝ、ひとりごちて、歩を走めて、礫川へと横ぎり下れば、駒込寺の鐘の声、數は九ッ、九品の淨刹、佛に媚ざる壮士も、輪廻応報眼前なりと、ゆめて極楽水の西へと進む、野に山に其名も紅蓮の浪切暖、大塚村へいそぎける。案下某生再説、蟇六亀篠は濱路左母二郎らを追留よとて、人遣りたれど、遂にそれと詰まつ、土太郎さへに馳立て、件の男女を追せしかば、十に八九は捕まるべし、今やくと立て見つ居て俟ども音もせず。夫婦が胸は荒磯の波の隙なき如く、うち騒ぎ、ちくろもさらにあらしの風に挿頭の花を取らしたる後悔甚しく立もして、絶て空しき夏坐舗に居流れたる蝋燭の涙と共に、形なく。夫婦は泣も合さねど、今宵ばかりは一時が千年にあれと祈るのみ。外面過る人音に、或は濱路を捕て来る歟と、虚頼しく生つゝ、或は簸上が来る歟と胸窺あれど膽を冷せど、庖厨なる美味は水になりふも、きつろえつゝも炙肉は、いとうつゝに半饑炭になりたるも見ぐゝらしけど、心こゝに在ざれば、食されども饑を覚えず。その舞足の踏ところ知ざれば、麻衣の裏衣の裰の後の縫目てらと忘とちりとかくほどに、程よ十九日の月高く昇て、今ぞや夜中になりしぶ。ずぶいひそめてこそなる。陣代簸上宮六は媒妁軍木五倍二と連拉て、蟇六許詣来ふけるほど、各麻乃上下なる礼服を著されども、潜びやかなる婿入なれば、従者をいと寡くして、一個の奴隷に挑燈を引提させて先に立せ、若黨両人鞋奴両人を従へて、且呼門せらりければ

あるゞ夫婦八今さらふ周章くせんもべを走らせ亀篠ハ勸盃の塩梅仏ゝと形しとく
ゆゑしく庵温ゑ起ちく彼此ゑ忙然る婢女们を呼ぶ仕く儀頃ゑ火を焚せ
炭氏起させ給ど走る紛冗更ゆいべくもどそぶ程ゆ墓六ハ応ゝと答ちぶ
書院の蠟燭を継くく常るゑも戦ゝるそこゝ一遍掃出しく爰関ある式
臺へ投るが如く出迎ふゑ早く速なる来臨ゝと辱くてそれ〳〵誘ゆゑ先ゑそ
引て書院ゑ赴けハ宮六五倍二ハ會釋しく賓主の席定ゝる迭ゑ壽の辭を
述暑中の恙ゆ氏祝しく挨拶既ゑ說まども茶を勸るゆ中ゑ目戌
る程ゑ墓六も常嗅ゝてそく盃を進ゝせよと走ゝく催促ゝるまども応ゝ
しく早ゆめて茶ど飲と半晌許ゑしく亀篠ハ又ゞゝ渕濱の盃臺を捧
ゝく恭しく勸まゞ雛婢両人ハ義の折敷を按排ゝく銀子を執ゝる當下亀篠ハ
ゆを取ゝく宮六ゑ辱ゝて氏述る物のひゞゆ顔の色ゝ人生平ゆハあゝぐ

本末融ゝぎいと皺びる満面ゑ白粉を塗著る鼻のあゝゑ小鍋の炭を
ゝゝゑ塗添ゝゝ口ゝゝぎしく脣を圓め目を細しく阿諛のヨヌ辭を
傷痛けとバ宮六五倍二ハ見ぬ態しく笑を忍べハ墓六も妻の貞を見ゝ
ゝくあゆ浅ましゝゆのく白地ゑハさゝもいゝまゞ去ねく と促せゞ亀篠ハ
耳ゆもうけゞ真顔ゑあゝゝく暗ゑけり かく賓主の口誼說くあのく 碗
の蓋を取ゝバ美味噌汁ん肉ハ鯰の筒切ゑ新牛房を琉細しく田舍料
理も三饗七離時ゑ取てゝいと愛ゝしく箸を揚る宮六ゑ此二後ゝく
五倍二ハ汁を吸ひ肉を夾めバ ある無慚や鯰ゑハ銀子ゆ灰
保る東菓子を盛ゝ皿ゝ皿ハいゝゆゝと箸ゆかけく折敷の傷ゑ引
出ゞ墓六亀篠驚騒ゝく物体る物ども麁忽ゆも限ゑあり言
語同断許ゝ人と勸解ゝ折敷を引ゝく東菓子をゝゝとり隱し

只管外口を庵下る負せく羞を暗まども羹ハ亀篠がゐつゝ盛りめゐれば
さゝとゝく人を叱るも汐ゐるゝど一座忽地ゝゝけゝり。かくて又盃を勸る賓
主の辞讓果しあ仆まべ宮六ハ中〻屈くゝその盃を受るゆゐん亀篠ハ改添て
離婢小師せる。歡待態る宮六ハ傾んとゝく半も汐喫ぎ哽咽ま又伏沈ミ
食る盃を鄭く咲くと甚しくいと苦しげゆ見えしぐこゝそのいふと亀
篠ハ後方ゐ回りて背を捺ま蟇六ハ湯を勸めく五倍二共侶ゆ抱ゐ
宮六涙を推拭ひ式欷故実うゝゝ祇ども。ゐまゐ熱醋を飲せる情るし。
と怨ぶまハ蟇六亀篠ゐそれ惑ひく。銚子を引よせゝ。その香を襲ゆ果して
醋ゐり再三の亀忽ゐ愧く。婢女何を罵まども。ゐまも亦亀篠がゐつゝ節
ゐるゐのゐまゐ人を外ゐうゝもゐく。夫婦ハ冷汗を流を額を席薦ゆ掘
埋めく辞有しく勸鮮しぶ五倍二さゐゐ胃くしさゆ執ゐまゐ大ゐさゐゐぶ。

面人蘭一の酒宴ゐまゐぶ堂所ハいぶ〻混雑の失錯あゝん新人の病著ゐてゐ
つゝく彼ゝ人ゐ障まゐくハそまゆゆ鄭食心ゐし再度の亀忽ハ酒ゐ醋と等
類ゐゝく色も似ゐゝうゐぶ束藁子ゐハまゐぶれ寛仁大度の緻上大ハかぶゝりの
その何ゐあゝんこの盃ハ一巡ゐゝく婚姻の席ゆ更めゐゐぶ。と提撕ぶ宮六ゐ稍
憤り鮮く又盃をとゐ揚ゐう。あゐ夫婦ハ欷ぶく銚子を引ゐえゐ仕更ゐ種ゐ
の酒殽を添て盃を勸る程ゐ夏の夜ゐまハ短くてゐゐ子の時ゐまゐりゐゐあれ
ども濱路を出ゐぶ五倍二頻ゆ焦燥く。ゐぶく催促ゐゝくれば夫婦ハゐゐく
困ぶ果く軍木を傷ゐ請招れ蟇六ゐゐゐゐるゐゐ婚姻のゐハ今しゐゐ仔細
ゐくゆハども濱路ハ甲夜ゐり瘡幾りくいふゐもせんまぶゐ。僮僕何を呼ゐて
只管醫師を請来せぶゐ小夜のゐまハ醫師ハゐぶゐ人橋ゐけゐる僮僕何
さゝ一人ゐも帰ゐまゐぶ心苦しくゐそゆゐさぶれ瘡のゐゆゆしゐ日もゐゐで瘡る

べし。今雲時往せる人と真一寸ふ耳語ども。五倍二一切らけ引をそ。八亦謂ふ。新人ゑ病著あるゐハ豫く美知の婚姻を今さら翌まゞ待よ。あゝんやいろ〳〵趣人の偽ものハ新人の臥房へ案内ものその容体を一診せん。ある馬鹿こゝ敦圉ゑる声ものゞゝ高くなべ亀篠ハ傷痛くく倶ゑ匂をぞ苦しめる。當座脱を術弾く夫の袂を引動。今ハ隠ふよりもあらぬ明く地ゑ告くまへさ〳〵く勧解るふまをとあらゞと。ゝくなく蟇六嗟嘆ん腋下ある冷汗を推拭て容を更め軍木大人願くハ舊の席ゑ著め人あん疑ひ釋まゝさんといゑ五倍二いとく。ものとあるふ扨ゝ。請る隨ふ復ゑをゝ。當下蟇六も身を轉く再拝。賢公西所上ふ在せゝ。ものゞふ欺ゑまゝんや濱路ハ甲夜ゑ逐電せりと告る彼西人笑ひ怒ゑ驚ゑ怒く声をふり立逐電せ〳〵く事済べゑやそハ彼犬塚信乃とやらんゑ妻せんとく落ー遣ゑー欺又彼奴が孫て走ゑー欺今速ふ引戻せと

ものとのふとゝくそゝと聽んや戻せ逐せと滕突進めく。両人齊一遍立ゝ。かゝくければ蟇六ハ却ふ胸を居く平伏る頭を擡縁由をも笑果ゝく。ゝん腹立の酷ーゑる。現さあゞゑるの孤ゝゝ且某がまゝゝとゝ式巨細ゑ聞召ゑよ信乃ゝるハ豫てより告ゝりー情由あるバ渠を出ー遣ゝんとく某夫婦ゑのゞく肺肝を推き智嚢を絞ゑ熟く謀りく遠離ゝゝ渠いふーく濱路をゝく。走るとゞゑ。疑ーゑハ近都ゝる浪人泓乾左母二郎のゝゝあるゝるゝゑふーもゆゝゞ彼奴ハ俄頃ふ家材を沽却く鄙ゑ逐電せーと笑ゝ濱路を誘引出せーゝんさゑべその折時式穏さゞ僮僕们を駈立く追せさゑどもいまゞ返ゝゞゝ又さゝるゞふてゝゝゑゝる。土田の土太郎といふものを傭遣ー間道提灯漏さとるく追捕を蒐さるゝ所ゝゑバ曉まゞゝゑハゝく来ゝべー。斯まゝゝふふ偽あゝゞ某が白髪頭を取ゝせゑゝ恨ゝゝー枉く且く倹せゑゝと亀篠共侶辞を盡ーく。肝膽を吐き実と

山清堂蔵

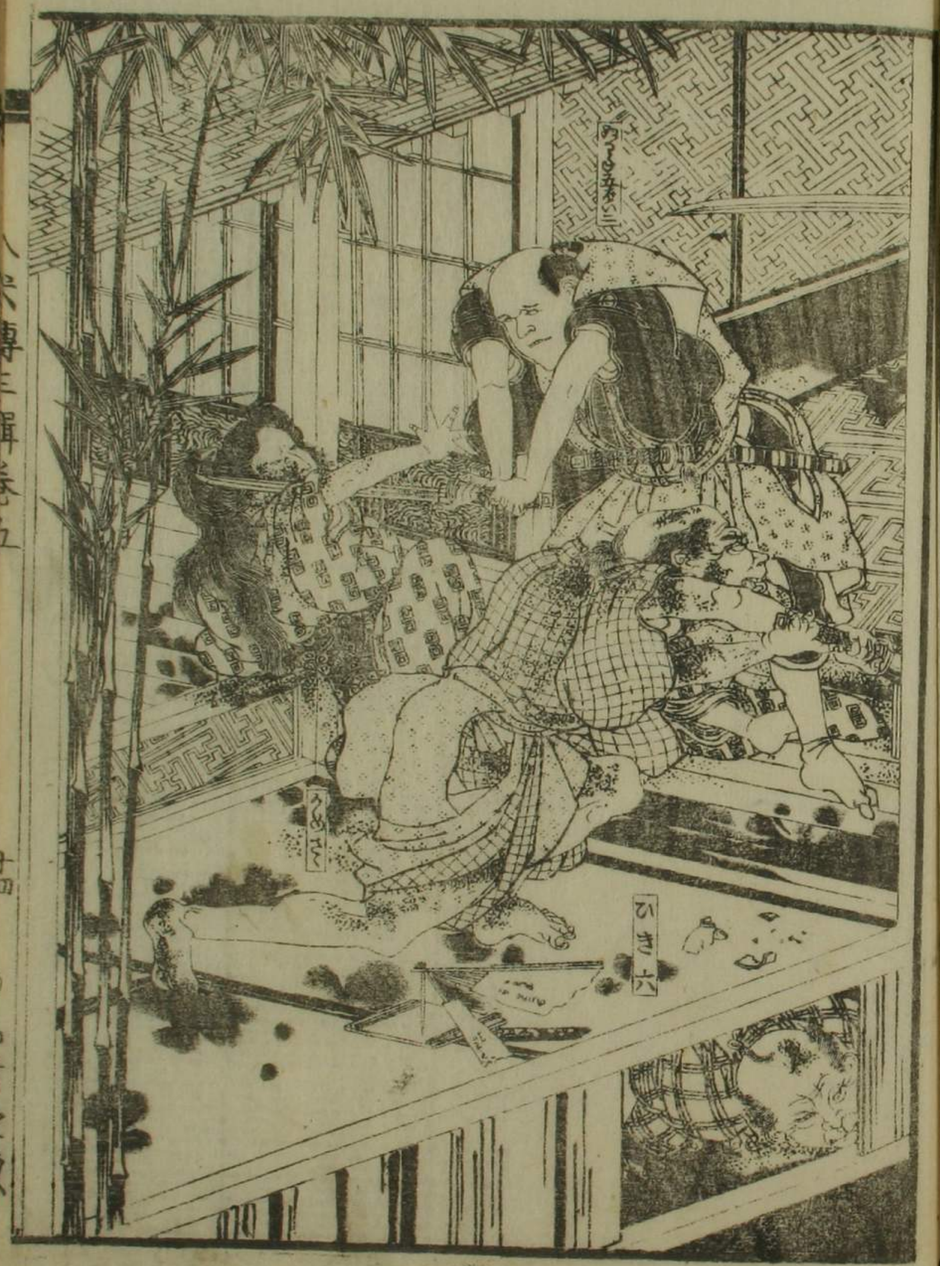
ず。告て叮嚀に和解すれども宮六五倍二ホに孤疑ある随解けず。倶に怒れる声ざるを
まど。尖くそハ胡乱え辯を振りて陳ずれハよく聴よしあらんや左毋二が濱路と相て
走りしといふに正しき證據ハあらじ。密夫ハ孰にもあれ聘礼物を受たる女児と
迯せられバ親も同罪のひ釋べるのは後暗かり汝ホハ初より贈物を貪りて
熟く吾們を欺かんとするにあらずとやいふべき。熱湯を飲さるゝとハ世話にいへど。
熟醋を喫せる饗応ありや。東蕫子を敬せらるゝも欺待といふべき歟さるべく。
汝ホが寛怠なり。かくの如くに童役を弄ぶ村長あるべきや。加旃前の日にも。
濱路ハ風邪に臥すと偽り今宵ハ痞が發りしといへり前後四道路の非義
乱言呀詮濱路を出さずバ目に物見せんと左右よりし刀の鐔寛げて。譴責
る威勢に蟇六も亀篠も顔色まさをく著さめて魂不とく身に添ず。仰
寔に理あれ寔に然えと吾るのミ齒戦して止ずど轨酬の雛婢ホハおそれて

其処にあるをバ見ざるうるぬ且くしく蟇六を胸を鎮めて後方なる脱掉の刀を
取て宮六ホがほとりまふさし措そ両君今その疑ひ釈せあらんとするが。それ
刀を御覧せよこれハ是故管領持氏朝臣より春王殿へ譲せありし村雨の
下刀なり信乃が父犬塚番作結城に籠城せしとき盗取て脱去寂後に
その子に與へり某このよしを知る故にいぬる日云云の術をめぐらし信乃を神
宮に欺引出して刀を掏替取るゝ豫てハ管領家へ献らんと思ひしかれど
當坐の質物濱路がかくまで求るとき聟牽出とも齊せよとこれぞこの蟇六が。
誠心なりと真さらく件の刀をさし示せバ宮六世二氣色を和げこの刀をめて
村雨丸とさとるにハ正しき證據あるやと向ふに蟇六微笑て陣代いまだ知でや
名に負る村雨丸の奇特さる引抜とときハ忽地に刀尖より水氣霤り殺氣を含て
うち振れバその水四方へ散乱して驟雨の降るが如し某既に試たり何の疑ひ

必死とのふ宮六うち頷て現さるよりハ庶子作んつ且一見と取揚れば亀篠ハ
蠟燭の真摘捨てさ〜寄まる燭臺を又引よせる五倍二ハ小膝を進め音ふ
のゝ竹〜名刀をよき折うふ一隅見せる某さへ福ひあり〜くと勧れば宮六
笑ゝ引抜て刃を火光よさ〜よせく皆ゆろ共ゝ見をそるさ〜検れば
水氣ハ顕まで見ハいふ。とうちかへ〜と又かうへんくも平ハる〜果おち腹立て
只管ふうち振まハ後方の柱ゝ打當く刀尖此二曲りふけつまを五倍二ゝ手くを
見を見く。天晴名剣水氣ハたゞ火氣ハ帯さる焼尤あるんとゆゞこと笑ハ
宮六ゝ怒まる面色朱を注ぐく墓六を信と眺まへとの白物贈太〜かゞ
うまの鉛刀を誰〜村雨の刀とおのれん一度あるゞ二度あるゞ〜ゝ紙侮る
老耄奴覚期せよと罵まハ亀篠遽く。声ふり絞ゝ。いろだかゞふ賞ふとも。
いぬる夜水の溢まし紙ゝハも側ゝ見つるあ紙といはせも果ゝ宮六ハ合さる

刃を席薦ふ突立向ふざるふ推曲まハ鍋蔓の如ゝまさる紙又引抜て投出〜。
汝ホかくても爭ふ欲と五倍二も共侶ゝ醜客の癖あまハ挿もけ〜ゝと腰刀ゝ及うち
うけく詰よ〜まハ吐嗟と驚く亀篠ハ腰うち抜〜くせんまぐ〜ゝと墓六ハ只
果まゝ果く勧解んとさろふ辞もあ〜。原来伎倆の裏をかゝ〜くとの偽物と個
せ〜ハ信乃ゝるゞ紙欲左毋二奴欲二人ゝ一人ハ違ハ〜とゝふ和ゝ今さゝふ人を
外さくおのぶ非をいひ糶べくもあゝさまハ且あゝまハ且羞く忙〜く刃を起〜逃
んとさまハ宮六ハやゝ〜怒る血氣の勇倫児等と呼ゝ〜く抜内を刃乃
稲妻あびせ被る一ト撃ゝ墓六ゝ肩を砕くまく仰ざふふ倒る紙再び撃んと
晃ゝと刃の下ふ亀篠ハ轉ゝ輾ゝ宮六ゞ向膓を抱ゝる老女のちゝ〜も一生
懸命。五倍二うち見く苑蒐ゝ妨げまるゝと亀篠ゞ頭髪を左ゆふかゝまて
引放さんとーはまども放さぐ人を咎ゝ支まハ息の根留んと刃を引抜き肩尖

隱慝の惡報
墓六亀
篠横死を
ひろと宮六


ひき六

四五寸押砍よだらとぞんと辟ざろ。亀篠深痍よ霎時も沼堪ぎ苦と叫べも。宮六も後ざゐ疎放ざろその間よ墓六も銚子皿鉢を投ゑけて枉ざろ刃を踏直し且く防戦へども既よ痛ゆ式員さアとけまべ進退いよく不便ん宮六ホも

さもてそと弱ゑホ崇る嬲戯ゆ夫婦苦痛の声ゑハ枯ぎて鮮血の泥ホ尾を曳く亀篠四跋ホ墓六逃迷ひ蛇よ追ゑて七摶ハ倒さぐれ命ハ惜かゑまゑ脱る

まんと岡掘く折濱路左毋二郎ホを追ゑゆて先ゑや一人ゑり来る背敢ハ背門よゑを衝と入ゑて庵温を見ゑも次の間へいゆ紀くも人一個もそゑぎ只宮六ホが

後者四五人賀酒よ酩酊しく後者部屋よ熟睡せをを故あゑゑる婢女仏ハ大刀音ホ戦慄ゑ悉皆逃亡ゑろ背ゆへいゑでゑ見をゑるべ紀主人ホよゑを告んゑく縁頬よゑを進を近づゑ書院の障子を引開をハ目前ホ内アをとゑら被る

五倍二ゑ刃の光よ一声阿と叫びもあへぞ右の小髪を砍裂ゑて後ざゐホ滚落つ。そゑゑく簀子の下ホ躯ゑく苦痛を刃ゆゑく音もせぞ。ゑ伝役ホ宮六ハ怒よ

乗ゑく墓六よ数个所の痛ゆ式員せゑ。そひの隨ホ切ゆゆゑ五倍二を亦亀篠ゆ肩を砍アを股を劈紀十二分ホ苦せゑく両人齊一砍殪しゑゑく絶命を刺

ゑを浩然よ額藏ハ圓塚より殊ざゑホ歩をを毋ゑくかゑの来ゑ真夜中ゑゑホ諸折戸をひまゆ鎖ざる主家の光景ホゑろ驚ゑて。ゑ進を入る裏面ホ絶て

人氣ゑく書院のゑよ倒ゑく物音嘯く人声しをけまべいゑく驚紀怪ゑゑいを

ゑく草鞋を脱捨ゑく走アゑく其紀よ来ゑく見をハゆゑ夫婦ハ砍仆され仇人を

日ゑろ認アをゑる陣代籤上宮六と属役軍木五倍二ゑホゑく胸よ乗し懸ゑゑく。

刺ゑる刃を引抜紀拭ひをゑり来ゑんとをる程よ額藏吐嗟と懸塞り声両所何

ゑへ逃去ゆゑぞ下司ゆをとも主の讐いゑでゑ脱をゑ紀ゑ。

ゑゑまゑく諸声を命をゑゑぬ愚人ゑゑ陣代よ無礼ゑる。村長誅伐せゑれゑゑ。

八犬傳三輯卷五
ひき六
亀さ
頭領
宮六
帰村乃夕
たろうまるく
仇を殺す
五たい三

奴婢ホハ連坐をおそれもせず、死ル仇人呼アエ奇怪ノ汝モ主の相伴させんと
蔑アエ誇ラ砍著る刃を外ーく打合させ左右の拳を働ーく両人が利脱を楚と
ものくと動せざりしかうるろく冷笑ひ莊官ホ越度あるべ同注所でこそ罪を糾
さあ毛擬の折ままあるホ谷夜中の来臨ハ酒喫んとの為なるべ下郎ども
亦五常あアエ主を殺せるく阿容こと雖言を目送る法あるや推るべて雄雄を決
せん。かくいふハ莊官ガ庭子ヨ当ル死小厮額蔵敵ひつハ足ずとも立あハれ
よと突放つ双ル死膂力勇悍ヨ両人ハ謄を冷ー捉ラ見ー脆ハ豚絶く摧る
ものとホ覚ーず迯ガとも脱さずと思ひ入ーく双方よりエ声をあうけど復打ラる。
刃の下を内アと潜アまく腰刀を抜合せ二人を拄く戦ふるろ所要の善悪異ゑれ
ども今額蔵ガ命ヨる刃ハ前の夜ヨ亀篠ガ信乃を殺てとく授る大塚匠作三
戍ガ数戦を經る鋭刀あアエぬーハ素より稀世の豪傑自得の武藝法ホ稱ひく。

秘術を盡シ奮戰ス突戰いまゞ十合ホ及ずして迯んとーる宮六を腸より九の
命の下まぐ。幹竹割ヨ砍殘ー返ス刀ヨ五倍二ガ眉間を礙と辟ワバ苦と叫く
逃走る式迯さずと追ハ程ホ宮六五倍二ガ後者ホハ後の大刀音ホ驚ル覚て庭
門より走り来ルと見エバ艘上ヨ既ヨ纜ヲ解く軍木ハ痛みを負ふも外面ハ迯る
とく。巻石ホ磯と跌ル向ひ遥ヨ轉轢びく。脱るべくもあらざるハ件の若黨西
人ハ己ヒを得ず刀を抜連ヒ額蔵を駈隔ラるそガ間ヨ両三人ある奴隷ハ五
倍二を負ホ引被け或ハ矛を添え足と釣り宿所を投く迯ヒるゆゑ額蔵ハ
怒る虎の群ヒる羊を駈るごく。瞬間ヨ彼若黨と左右へ撞と砍伏せく。
再び追んと支出る衝門の邊まく。濱路左毋二郎ホ紙追ひ来ーく。食共侶ヨ
立かる僮僕ホ交遭けり。このものどもハ額蔵ガ血刀を引提ラる為体に
驚騰ずく矢庭ヨ持ヒる六尺棒を横かるるホ連ーく。出ーも遣らず推禁め

車の様子を問もあり。或ハ刃をうち落しく。縛めよと罵もありく只管こと叫ぶ
のみ進むあ一人もなし。額藏ハ情由も沿なくぬ僮僕们ゑ抑立せられて只管ふ焦
燥ぶ。同士撃せんハさるがまて五倍二を撃ち偏らしん今ハ追ふとも及びくしと思へ
血刀を拭ひ納め且衆人ゑうち對ひく。あるど夫婦が横死のる。仇人敵上宮六ホを
撃留るよりを告く引く書院ゑ赴けハ衆皆更ゑ驚死呆れく是非の分別
なるあのなく只陣代を殺さうし。連坐をあそるとく忙然さりそのとき死額藏又いふ
。ハ是も今宵小夜深く下総より飯村老されば事の慈ハ沿なるねど主人夫婦
の殺り折還りあハせくかくの如し。五倍二脱去ると天も明バ城中より檢察
の鞫兵来るべし遅くハ問注所へ出訴しく復讐の趣を詳ゑ述んのみ今宵の
るハ各位の管るとゆもあるとう。好も反も額藏が一已のうんあるべけ是ぞ必
しを狼狽ふる婢女们ハ怕迷ひく逃亡さうと笑ゆるぞ彼ホを索く聚會

ふ一人ありとも。そもそもといぐ。そのあれゑ疑ひ被らん。そそのあくろ沿肝要と説
諭さんく衆人ハその識量ふ嘆服しいと感しくそひけり。○作者この段を創りて。
そうり謾ゑ賢くて之善悪応報果せる彼亀篠が不孝ふく且濫なる加るふ蜚
六ぶ不美残忍の甚しく神ハ怒り人ハ怒り見この奸悪と貪林女と夫とあり婦とあれり。
との故ふ家ゑ嗣ぐ兄の子あく外ゑ資べ兄の友あるし彼ホが大慾貪て飽くを式ちらざる
故ゑ日とく煩悩絶るとあるし竟くその悪縁を結ぶふ及びく亦許ヨの忍と苦しめ。
已が謀る所還く人ゑ謀らを最後ふ与るの兄辱を受て宮六ホゑ屠戮せられ
うちれだるの不幸ふく額藏あり。一人義ゑ勇く奸を鋤く兄悪と扶う。
吁義なる多額藏汚吏の家ゑ仕れども清く泥中の蓮の如し。亦よくその主の非と
補ふく信乃が為ふ謨るふ方あり。不仁の主を主とく雪中ふ乗殺せられし毋乃
為ゑ怨を舒ぎ又一飯ゑ露命を繋ぐ已が為ゑ思るしとせど今その讐を報ふ

及びく亀篠が授くる。そゝ親匠作が造刀をかゝ〳〵人の僕さる道を盡〳〵く。敢縲絏の咎を辞せず。噫賢なるかな額藏宜忠義の人とまべし。

第三十回

芳流閣上に信乃血戰す
坂東河原に見八勇を顯す

却説その曉ゑこに近鄰の莊客村の翁に羽に聚来く事の趣を問諦め。或ハ問注所へ告訴し。或ハ額藏ホをうち護ゑる程ゑ天ハ明く六月廿日も。已の比及ぶなりぬけり。浩処ゑ般上宮六が弟般上社平軍木五倍二が同僚卒川菴八ホ許ゑの火兵を率ゐ。莊官屋敷ゑ来ん莊客們ゑ案内さそ。書院の上坐ホ床几を立させ且此彼の死體を展撿し。又額藏ホ園宅の奴婢を悉召よせく事の顛末を訊問ふゑ。額藏ハ主命によりて一昨下総なる栗橋へ赴く。昨夕更闌く般村の折主人夫婦が殺害ホ報ふとゝもに。愬ゑ若黨ども。ホ拉ぶ。剌傍輩ホ抑留せられく軍木駭い駭ホ漏し。送恨限ゑなしとゝハ又濱路左毋二郎ホを追さうける僮僕們ハ宮六濱路が婚縁のる。并ホ昨夕堺入のる。又濱路ハ甲夜ゑ逐電せしゝ。追留んとく食彼此へ奔走し。終ゑ以及ぶ。さかゝる折。衡門のわきゑ。額藏が血刀を引提て走ゑ出ゑる撞見けゑ。うち驚ろく推留さるのく墓六夫婦が殺れしるも又額藏が陣代を害せしるも一切ゑ弐ちゝとらゝ。當下社平ハ声をふり立かゝ。額藏ゲヤ狀始終甚胡乱ゑ既ゑ実を以さう。彼奴ハ亀篠が甥なりとゝ。ゑゝる大塚信乃を竊ゑ資く。主の女児を盗出し。更ゑ間戻し〳〵く主の金銭衣裳をゝ盗ん。ゑる後ホ夫婦ゑ外ぶれ已ゑ以ぶ。墓六亀篠を砍殯し〳〵く逃去ん。とせし折ゑ。こゝ兄宮六ハ屬役五倍二共侶ゑ品草濱へ遠足のかゝるさ。たまく湯を乞ん。とく墓六許立よりく。不

意氏殺されて命代限り若黨さえ害せられて五倍二人脱出されしこそ
五倍二が告訴の趣まことに実説とさるゆえ足まろいつゆとあるべく年来村の白熊が
載せる大塚信乃がをとどるべきは第一の不審なり又ぞ兄宮六が浪路を娶る
るとのみは究めるる虚言いつゆとあるべく陣代は最官ゑ村長は卑職ゑこの
婚縁相応ぞ況城主の免許を請ざるべく壻入さとのみるるあらんや
加旃昨夕圓塚の山中まく細乾左母二郎ホさぐく四人を砍殺して怪しき
擂を建るめあること亦信乃欠額藏奴が所為まく件の濱路を左
母二郎ゑ害せられさるとのみるる底ふるべ仮倆あるべし且下郎の分際ゑて
陣代を害せるる律ゑおいまく大逆なり何ぞ仇討とのみまんやゑ
今彼奴を八創まく兄の怨を復さえんとはかくもあらぬ所為あるべ
いまぐ主君の免許を待ずまく私怨氏報ふまよまく宮六が亡

骸をとゝ歛め且その讐を搦捕ん為ゑ平川生を相伴へ額藏奴を縛め
よと威勢猛く下知せるべ義ゑと応もあくまで群立かる鞍兵ホを拄る額義些も
騒ぐ色なく敵原の仰くも所いかゞ大塚信乃ハ一昨の暁訐我へとく起ぬ衆
人のある所ゑ當坐の差を暗めんとて欠鷺を烏と宣ふとも蟇六夫婦が横死の
婢女どもゑとく知さえ忠義ホ賤の差別なく主人の讐を報ずるとて
大逆とせられて縛を受かく鞍の證人あるべ隠おをりくせられんを
其心せざる所ゑさでも公道あるべ元やと理但ある大勇ゑ鞍兵ホを下し
ゐるを阿容ゑとく護てをりこれより菴八ハ婢女們を推並くその夜の
為体を訊問ゑ食社平が氣色ホおそるべく果敢てこそ回答せざるべく
問れて一両人大刀音のおそろしゑ背門より逃去ぬ一人さべてハ知らぬ
と答けり社平ゆく冷笑ひされば蟇六ホが害せられをゑんさるゑ

其證人とするよしあらんや。彼奴はいたく鞭ずはいかでか實を吐ん。とて縛めつゝ焦燥折から。簀子の下に人ありて嚶く声しけれバ。衆皆驚怪みて。三四人下り立て躬て引出しつゝ燈に見れバ。是則別人ならず。蟇六が老僕背介也。昨夕五倍二に小髪を砍られて。簀子の下へ滾入て。遂に息絶たるが。今漸に甦生しつ。這ふ吉と立たる。僮僕們はこの為体に復駭ざるものもなく。昨夕和主がかくの孩ハ野狐に魅されしや。とそのほか一遍索ねたりしかバ。さて痍を負たる縁由を。やあげにある鈍ましやと勤みて縁類へ推上せバ庵八間近く立よりて。そのいふよし糺明するに背介ハ昨夕傍輩に先だちて。かへり来る蟇六夫婦が額を折たる。ぞとしく縁類より書院の障子を閉しに五倍二に小髪と砍られて仰さまに滾落ぞ。そのまゝ簀子の下に躱れて額藏が仇を報ざる。爲体いて。さまりかゞり程に金瘡痛みて。その後のことを覚ず但瓶上叡軍

木殿にあらず夫婦が戯しれるハ一定相違なしといひけるを既にこの證人あれバ社平ハ今けふに誣たるべかるならずさらなく庵八はうち對ひ衆人もさしてさてさく獨背介が側杖打も聞論の為体を見えといふを詰しかぞや虚実ハ多聞によるめの然楽一人を證とさふし察たるに背介奴も額藏が支黨ならん。さふいひめりバやといへバ庵八甚訝して頻たるをもゆるん且額藏を禁獄して事の趣を鎌倉へ伝のえおけ尉の殿（大石兵衞尉をいふ。この時鎌倉に在）のちん下知に任すべしかくまで退かく老輩と商量し舎兄のあるに恥を雪め告所のあるに怨をかへすのよしあらとまで夫さまして見非を論せんハあるかく不外の言し且穏便に退あへと耳語媚て和解たり。これよりて社平ハ準備の轎子に兄宮六が亡骸を扛乗させて彼若黨が亡骸共侶宿所へ遣しぬ額藏にハ枷を被け背介を箯にうち乗せて莊客ホに舁しつゝ卒川庵八共侶に城の向注所を投てかへり去まバ雑兵ホを額藏を牽立て。

後ふ後ひ先ゑ立陸續とて退りり話分両頭。さ程ふ犬塚信乃戌孝八十九日の朝すぐ死ゑ栗橋の驛ゑく額藏と訣をゑろち幾里もあゑぐ許我ふ赴ゑ城下乃町ふ旅宿をトく御所の紫内を問究め執權横堀史在村ゑ第ゑいゆ乃ゑく名簿を投し由緒を述亡父犬塚番作ゑ遺訓ゑ隨ひ昔御所の兄君春王殿より須りをアとろ村雨の宝刀をるく。推叅せし事の趣則執次乃若黨ゑよりゑく愁訴ゑくけりかくく俟と稍久して在村出く對面しるゑその父祖乃由緒と軍功を糺明め御所ざゑ成氏を鎌倉ふ在せし比持氏朝臣の舊臣結城ゑく討死せしゑ子孫を悉召さとし折番作ハゑ乃ゑくゑ宝刀さゑゑ披露せざるとしゑいろゑ故そと詰問ハゑ信乃ハ親番作ゑ深痍よりて遂ふ廃人とゑりしゑゑ又伯母夫大塚墓六ゑる我告く遅系の疑ひ我いひ釋ゑその辨論爽ゑしく。敢伯母と伯母夫の奸悪を顯さゑど又唯亡父の美氣を隠さゑど言寡ゑく條ゑく軈ゑ。疑意細ゑふしく作ゑえざるとゑし。在村ハその才幹ふ驚てゑろふこゑ我忌とのくどもさてコベたゑゑあゑゑざゑハ要時沈吟しくのふゑ由緒かくの如くゑて、持系の宝刀相違ゑくハゑれ老臣ふと相譚ゑく近日御所ざゑゑ作ゑえあけん。旅館ふ退アとく俟さむとゑとのゑゑ乃ゑく安堵ゑる信乃ハ唯ことゑく領義し。躰く客店ゑ立ゑまバその日ハ既ふ暮ゑけゑかくくその詰旦信乃ハ忽地ふゑふゑ。村雨ハ名刀ゑまバ先考年来ゑゑ巨竹の筒ふ藏めく梁ゑ掛ゑひしゑゑだ。一点ゑアゑ錆ゑゑゑゑし。大人の刃まゑアゑのひくハゑゑ亦年来腰ふ帯挑ゑ建く盗難ゑあゑゑとゑゑひしのゑゑく拔試ゑるゑゑゑゑれバゑく今許我殿へ進ゑゑゑふ刃の塵埃をも拭ざゑんハ准備ゑゑゑゑ似ゑゑゑかくハ旅宿の後然ゑるふ。ゑゑゑくゑゑゑゑふてゑとゑゑふ傍ゑ人のゑゑゑ隨ふゑゑゑ障子を引開く床柱のほとゑゑふ坐を占め件の大刀を左ゑふ含く。まゑ鞘系い塵埃を拂ひゑゑゑゑ

鞘を推拭ひ引抜たく刀をつるぶ村雨よくあらざる。けり呂ハいくふと驚たく又
とゝと直ーく熟視るよその長短ハ等ーけれども燒刃ハ全下ふ似るべくもあらず。
いひひろげるたるまゝ胸うち騒ぎく駐ぐと又つくくと想像るふ。是ニの
大刀を片晌も傍ら置ざる時もなく腰ニ帯ざる日もあるまーふいつまでく揺登
らまくんそまゝ欲といひあハさるハ神宮河の舩中のゝ荘官ぐ網ニつられて水中へ
陷まーハこれを害せんあるのくさるぐく左毋二郎さ人相譚まつるぐ荘官ど殺んとて
続く水ニ入まーとた独彼奴ハ舩ニ在りそのーた揺登さるあらん彼左毋二郎ぐ人
とゝ遊藝歌曲をよくるのゝ武器を好るのあるぎと日ごろ人ハ由断ーく
その折刃を接るもんぞ且夜間のるのーく荘官の入水ハ救ひ事ふ紛まて
疑ハぞその霄よるまきのふまぐるぐ一身の進退ニ他ニを見えるぐ進ニ名れぞ。
事竟ニとふ及ぐり唯前門ニ虎を禦く後門ニ狼を進めら彼ちぐるーん。

ぐるぐる愚ニ既ニ宝刀を要ひくい父ニ不孝の子なるべく君ふ不忠の臣
なるべーこハ何とせん。とぐるるまふ怒るる眼光凄ーく刃を撲地と擲く賜を断
遺恨後悔ニふせんまぐハるのりけるかくくあるぐたニあるぐ是ハ刃を鞘ニ納め
つ。數回歎息ー。室刀ハ贋物なるるのを。ちるるぐるまー日ハまぐもまーー今その
るを知るぐる。許我殿の君を俟ハ。是ハ赤夫人ニ似るんたふく訴おるうさんとて。
御笥をとる生ー。髭を搔拊袴の紐を結びあんぐ而刀を跨く立出んとする
程ニ忽地城中ニるる横堀在村ぐ使来まる。信乃をいみく安るうぐ躯く
對面まるふ使ハ若黨両人ゝ奴隷を招たく柵笹ニ一領の衣裳をとる出て。
これを信乃ニ進めくるのふ。此度進上せるる室刀のる今日老臣連の一覧ど
歴く御所の見系ニ入るべけれハ速ニ登営ちるるのるり。
横堀殿の指揮ニよりてもん迎ふ事ニるるく出るとふ信乃ぐくく兼諾ー。

仰義りゆひぬ某も亦申上べくあるべし横堀殿まぐるまうんとて旅宿を出る
折ふしそあるを聊ゝ旨あるべ賜めれ衣裳ハ且く領けまうん誘ゆといひうけて
遽しく走るを見ハ使の若黨奴隷ホハこそろゐうくしひく喘こそ後ひ名さ侍程ホ
犬塚信乃ハ頻ヨ進く在村ガ第ホ起元あるどの對面を請ヨけまどもたや
登營しく宿所ヨ在らどせんまべるさホ又件の若黨ホ導ずせられて
營中へ来る程ホ今ハ衣裳を更ざらんも不敬るべしといふヨるん屑のわとり
ゐく彼礼服ヨ更めゐ。まうより謁者の甲ひホ價せらまく遠侍ホ赴けば攣ざや
嚴重ゐく在村ガ在ところ弦ゐどこの故ヨ信乃ハ宝刀紛失の趣ス訴るホ
よるくいゐく心を苦めけり且しく件の謁者ホ又信乃を價て離見の間ヨ
赴けバ上壇ヨ羣簾を垂く成氏朝臣の裃を儲そバ下ヨ横堀史在村その
他の老臣侍坐ゐる左右ヨハ鞍の近臣磨るバまり又廊下の邊ヨ身甲

ゐくる武士數十人齊くしく非常を整め整くしく列を正せりその為体いと晴
ゐまくゐんさりける既ヨて成氏著座ゐひりのまぐ翠簾ゑバ揚らまど
當下横堀在村ハ遥ホ信乃ヨちち對ひ結城の城ヨく戰殘の舊臣大塚匠作
三戍ガ孫犬塚信乃その亡父番作ガ遺言ホ隨ひ當家の什宝村雨の一刀を
献るゐ神妙ヨ思召さる且吾们一見まべ大刀を進ずせゆといふまて信乃ハ
一期の浮沈とそくど騒ガど頭を擡さ件の宝刀ハ年来盗ミとゐんとて隙を
窺ふあのゆゑかくく某今朝も刀を拭んとく引拔ゐまバ浅ゐくや舊の刃ホあら
まどくいゐの程ゆ揺昏らまさる。ゐひらけるゐるのまバ且駭ゐ且悔く腑と嗤ども
その甲斐ゐるくよるまくこのゐ式訟ヤスバゐるヨ推ホせんといふホ折ゐん
使をあゐるく慚愧ヨ堪ど呀存齟齬せゐ。あらまど數日の宥免を蒙りて失ゐる
宝刀を穿鑿せバさゐ復さるまあらバ。この義を願ひまゐるといハせゐ果ど在村ハ

忽地怒る声を揚て立そハ甚しく麁忽え失うといふ證据ハあらじいかぞや。と敦圉譴る氣色ゐ信乃ハ些も臆せずちん疑ひハ理え遠侍ゑ罔をる。某が扨糸の一刀取よせて御覧せよその刀こそ村雨るふね鍔も鞘も縁頭もその表裝ハ舊の侭えこそ揭ゑて見る證ゑこそとの紙ハ聽ゑず冷笑ひ嘉吉より今ゐ至て幾ゆ四十年ゑ近し六七十の翁ゐふぎハよく認るの稀るゑん只その證ゑさ紙ゐハ刀より立る水氣のそ。ゆゑ這奴ハ敵ゑの間諜者ゐ疑ひるしとく生拘れと焦燥ぎ。廊下ゐ列坐る鞍の力士群立る。信乃ハ横堀在村が漫ゑ權を弄びく賞罰と已ゑまくゆし人を容るその器量るれゑ。阿容こと虜ゐるゑハ竟ゑ渠が てしゐ死るん脱きらんとゆひしふハ組んと競ん力士ゐ紙右ゑ拄え左ゐ投退後ゑ立る紙ハ丁と蹴倒し。飛鳥の如く身を働しく。ほとゆ人ゆ也附ぎ翠簾の内ゐ成氏朝臣。その性烈しく短慮の大將。裃を蹴放ち。身を起しく。彼

戰ゐ苗よと下知ゆ人ハ兼ると戰の近臣ちのく刃を拔翳しく。透間もなく攻撃る。白刃の下をゑん潛る。信乃も疊薦を蹴揚ゆ。篭槍を取く防ぎ闘隙と揣ゑく飛ゆ。先ゑ進ゆし一人ゆ刃を奪ふく砍殪しる。不八方へ殺ゑ奔けて十餘人ゑ疲を負せ八九人を砍伏せく。賓客ゑ跳出軒端の松を木伝ふく閃りと屋上ゑ飛登ゑ。或ゆ槍を突揚く蛭卷より砍斷ゑ或ゆ矢庭ゑ追登ゑく。深疲を負ゆく一雪崩ゑ滾落るゆ多ゆかゑけり。暫時の闘戰その甲斐ゆく。信乃一人ゑ砍立られく。血ゆ泳鹿の野を浸し。屍ゆ朝歌ゑ累くゆし。信乃ゆ浅疲を負ゆけれハ。鮮血を啜く咽喉ゑ潤し。屋根より屋根ゑ伝ひ登ゆく。脱去るゆ方を揣るゑ要害の物見と覆ゆ。三層の樓閣ゆりゆ。これハ見遠見のゑ建ゆ。芳流閣と名つけゆ。信乃ハ脱る路をゑんとく辛しく攀登ゑ。城溝ゆ渺ゆる

犬塚信乃
犬飼見八

犬飼見八君命かうむりて
信乃を搦捕んとす

大河ゆりて流を閣の下に引たる。水際に快船纜繋れたりとぞ。俗に坂東太郎と唱へて八州第一番の大河なり。その下流は葛飾なる行徳の浦曲より巨海に朝する咽喉なり。更に後方を見るときは是首の廣庭彼首の城戸に数百の士卒屯して射て落さんと弓杖樹なり。進退ほとく究るよし敵あらば登りも来ば組て戦殺せんものをと思ふ外他するのみなりけり。さる程に前管領成氏は夥の士卒を発せて。怒りて力士を聚會信乃を搦捕るものなき。加恩千貫文を賜ふべしとおちもなく徇させ給へども。彼武藝に看懲して兼らんといふものなし。當下執権在村は成氏に稟して獄吏犬飼見八信道はおん抜萃の職役を固辞まうし。贖強て身の暇を乞まうし外にありて月ごろ禁獄せられたり。渠は古人二階松山城介が武藝允可の高弟なれば。就中捕物拳法は本藩無双の力士なり。且くその罪を寛めて信乃を搦捕せなば其功

成らば見八が死罪を赦さん。又信乃は惜むべきものなれども。此議はいづれも真とまうして薦まうせば。乃ち領ぬ。汝が意見究てよし。とくと仰せあるにぞ。在村は時を移さず件の犬飼見八を獄舎より牽出させて。その縛を釋放し。君命を述伝へて大刀身甲。肱楯臑楯に十分を添て取せければ。見八辞ふ気色なく謹て領承し。生ても鎧ひて居縮まりつつ足搔式を在村に辞別をして。三間階子を走登るに猿の捗を倣ふが如し。孫廂のあなたより芳流閣の屋棟に血刀引提て立たる信乃を遠よりうち瞻て。些も擬議せず雲を凌る楼閣の甍を踏て進む程に。成氏は在村木老黨近習聚めて。廣庭に床几を立させてうち仰ぎ瞻ば。主従は陥るものなりけり。畢竟犬塚犬飼両雄の勝負如何ぞや。次編を嗣で巻を更て第四輯の端に解ん。出像を覘て餘韻を味ふべし。

里見八犬傳第三輯巻之五 終

編述　曲亭馬琴稿本

千形仲道騰寫

浄書

出像　栁川重信繪画

中村喜作

彫人

家傳神女湯　一包代百銅

婦人諸病の良劑なり第一産前産後ちのたちを用ひてその功神の如し又うちこみふうしゅもを用ひて急ぐんをたちまちに八包紙は去るべし

精製奇應丸　偽薬をのぞく元来真物をえらんで奇効あるを以て世に聞あり今畧之

大包三百粒餘入代弐朱　中包三十六粒入代壱朱　小包十一粒入代五分

婦人つゆむ乃妙薬　毎月つゆむ一ふくの即効あり又産後ちのたちをとりのぞくべし

半包代三十二銅　半包代六十四銅

製薬弘所　江戸元飯田町中坂下南側四方みな右向瀧澤氏製

同家出張所　日本橋通神田明神石坂下同朋町東新道　瀧澤宗伯

取次所　浅草神明前　いつきや市兵湯　大坂心斎橋筋唐物町　くすりや太助

著作堂隨筆　玄同放言　三巻天地部草木部人事部の上まで出版　全九冊

大阪　河内屋喜兵衛　東京　須原屋茂兵衛
同　伊丹屋善兵衛　同　山城屋佐兵衛
同　敦賀屋九兵衛　同　小林新兵衛
同　秋田屋太右エ門　同　丸屋善七
同　河内屋茂兵衛　同　和泉屋市兵衛
同　河内屋和助　同　須原屋伊八
同　秋田屋市兵衛　同　出雲寺萬治郎
西京　出雲寺文次郎　同　屋喜兵衛
同　村上勘兵衛　同　辻屋半七
同　勝村治右衛門　同　長門屋龜七
同　杉本甚助　同　三家村佐平

名山閣　東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售